

# かみや でんべえ 神谷伝兵衛

国産ワインを一貫して生産した醸造家 牛久市



(牛久市教育委員会提供)

安政3年(1856) - 大正11年(1922)。三河国幡豆郡松木島村(愛知県西尾市)の名主神谷兵助の六男に生まれる。8歳の時に桶屋に奉公に出されたのを皮切りにいくつか職を変え、17歳の時、横浜のフランス人経営の酒類醸造場に雇われた。その後、東京で醸造などに従事、明治13年(1880)に独立し上野で酒を商い、同15年、輸入ワインを日本人向けに再製し「香竈葡萄酒」として販売する。同27年(1894)、婿伝蔵をフランスのボルドーの醸造場に派遣、ブドウ栽培や醸造法などを学ばせた。同30年、女化原(牛久市)に土地を求め、ボルドーから輸入したブドウ苗木6,000本を作付け、さらに栽培から醸造、出荷まで一貫して行うための施設(シャトー)建設にとりかかり、同36年に完成した。平成20年に日本初の本格的ワイン醸造場として国指定重要文化財に指定された。

神谷伝兵衛は、幕末の安政3年(1856)に三河国幡豆郡松木島村(愛知県西尾市一色町松木島)の名主神谷兵助の六男に生まれました。この地方では酒造りが盛んで、幼い伝兵衛は、その大きな屋敷にあこがれをもち、8歳の時に酒造りを学ぶことを志したといいます。伝兵衛の親は、「まず桶屋で仕事を学びなさい。」と奉公に出しました。その後、雑貨などをあつかう商いなど、さまざまな職業を経験しました。

明治6年(1873)、伝兵衛は故郷を離れ横浜で職をさがしました。貿易港として発展し、新橋までの鉄道が開通したばかりの横浜は、レンガ造りの建物がつぎつぎとつくり活気に満ちていました。

その後、横浜で伝兵衛はフランス人が経営する洋酒工場に雇われます。働いていたある日、腹痛におそわれました。医者にも治療の方法がないといわれ、日に日に弱っていき、ついに息が止まってしまいました。ところが、経営者のフランス人からワインをもらい、毎日少しずつ飲んでみると体力が回復してきました。

(このようなよいお酒が日本ではまだ多くの人に飲まれていない。輸入されたものは高くてもなかなか買えない。これを日本でつくって多くの人に飲んでもらうことはできないだろうか。)

いつか自分の手で、国内にブドウ栽培からワイン醸造までできる施設をつくりたい、という思いがしだいに高まってきた伝兵衛は、明治12年(1879)に独立して、上野で酒を売る店を開きました。さらに、3年後には輸入ワインを日本人向けに加工した「香竈葡萄酒」を販売します。

こうして資金をためた伝兵衛は、同27年



牛久シャトー遠景(明治38年)  
(牛久市教育委員会提供)

(1894)に、<sup>むすめおこ</sup>娘婿の<sup>でんぞう</sup>伝蔵をフランスのボルドーにある<sup>ほけん</sup>醸造場に派遣し、ブドウ栽培やワイン製造方法などの<sup>ぎじゆつ</sup>技術を学ばせました。3年後、伝蔵は<sup>げんち</sup>現地で手に入れた、ワインの製造に関する道具などとともに帰国します。伝兵衛はボルドーからブドウ苗木<sup>なえぎ</sup>6,000本を輸入し、同時に<sup>さいてき</sup>最適な栽培場所を国内各地にさがしました。

その結果、茨城県稲敷郡岡田村の女化原とよばれる原野〔牛久市〕が適していることがわかり土地を<sup>こうにゆう</sup>購入しました。明治30年(1897)のことです。この土地はその前年に開通した日本鉄道会社海岸線〔常磐線〕の牛久駅からも近く、東京への<sup>せいひん</sup>製品の輸送にも便利という場所です。さっそく苗木を植え付け、生育が<sup>じゆんちよう</sup>順調であることを確かめると、つぎに栽培から<sup>せいぞう</sup>製造、<sup>しゅつか</sup>出荷まで一貫して行うための施設(シャトー)建設にとりかかり、同36年(1903)に<sup>かんせい</sup>完成しました。

ここでは建物などの施設にフランスの様式をとりいれ、製造のための多くの建物だけではなく、ブドウ園で働く人たちの<sup>じゆうきよ</sup>住居などもありました。ブドウ栽培もフランスの方法です。

生産は順調に伸び、<sup>ひんしつ</sup>品質もイギリスやフランスの<sup>はくらんかい</sup>博覧会で<sup>しょう</sup>金賞を受賞するなど高く<sup>ひよう</sup>評価されました。シャトーには<sup>いたがきたいすけ</sup>板垣退助や<sup>かつがいしゅう</sup>勝海舟などの<sup>ようじん</sup>要人も多く<sup>おとず</sup>訪れ、伝兵衛や伝蔵との交遊を楽しみました。

伝兵衛は、このほかにも多くの会社の経営にかかわり、<sup>さいがい</sup>災害の時には多くの<sup>きゆうさいしきん</sup>救済資金を提供するなど社会のために<sup>こうけん</sup>貢献しました。

大正11年(1922)に66歳で亡くなり、ブドウ園の一角に<sup>まいそう</sup>埋葬されました(現在は都内の<sup>ほち</sup>墓地に<sup>うつ</sup>移されています)。

## ゆがりのスポットに行ってみよう

### 神谷伝兵衛記念館

所在地 牛久市中央3-20-1 (牛久シャトー内)

内容 当時のワイン工場の中に、使われていた<sup>きかい</sup>器械とともに伝兵衛の<sup>しょうがい</sup>生涯を紹介しています。



### おもな 参考文献

『神谷伝兵衛—牛久シャトーの創設者—』(鈴木光夫・筑波書林・1986)

『常陽藝文 1989年9月号』(常陽藝文センター・1989)